

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ②情報の扱い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ③話すこと・聞くこと | 課題が残る結果であった |
| ④書くこと | やや課題が残る結果であった |
| ⑤読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 課題が残る結果であった |

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

解答の特徴について

- ・もともと正答率の高かった設問…適切な送り仮名を選択する内容と、書かれていることの要旨を選択する内容
- ・もともと正答率の低かった設問…自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書く内容
- ・もともと無解答率の高かった設問…目的や意図に応じ、話し手の考えと比較しながら、自分の考えを書く内容
- ・もともと無解答率の低かった設問…適切な送り仮名を選択する内容

分析

【良好であった点】

情報の扱い方に関する事項の内容は良好であった。特に、情報と情報との関係付けの仕方や、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解することができているかどうかをみる問題の正答率が、他の問題より高かった。今後も、複数の資料や文章を読み比べる中で、伝える相手や目的について児童が意識できる課題を設定し、情報の取捨選択や配列を主体的に考えたり、見直したりする学習活動を意図的に取り入れていく。

【課題となった点】

特に、記述式の問題は全体的に課題が残る結果であった。図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫できているかどうかをみる問題は、他の問題より正答率が低かった。自分の意見を明確に持ち表現できる課題設定や、児童が作成した文章のよさを互いに伝え合う活動を取り入れるなど、改善を図りたい。

○●算数●○

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ①数と計算 | 概ね良好な結果であった |
| ②図形 | 良好な結果であった |
| ③変化と関係 | 概ね良好な結果であった |
| ④データの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

解答の特徴について

- ・もっとも正答率の高かった設問…伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めることができるかどうかをみる内容
- ・もっとも正答率の低かった設問…高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる内容
- ・もっとも無解答率の高かった設問…示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる内容
- ・もっとも無解答率の低かった設問…伴って変わる数量について、求めたり、適切な組を選択したりする内容や、加法と乗法の混合した式を読み取ることができるかどうかをみる内容

分析

【良好な点】

全体的に良好な結果となった。一昨年度までの5年間、算数に重点を置き、授業力向上の研究を進めた結果だと考える。特に、見通しを立て、自力解決する力の育成をめざし、授業改善に向けて研究してきたことが、無解答率の低下に影響を与えたと考える。

特に、「B 図形」に関する問題で、良好な結果となっている。図形の意味や性質を答えたり、底面と面積の関係を基に大小を判断したりする問題の正答率が高かった。具体物を操作しながら行う学習や、タブレットを積極的に活用する学習を進めており、図形についての内容を身に付けることができたのではないかと考える。今後も具体物やタブレットの活用に積極的に取り組んでいく。

【課題】

課題が見られたのが、数と計算の領域である。加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすることができるかどうかをみる問題の正答率が低かった。それぞれの習熟度に応じて基礎的な四則計算の練習を積み重ねたり、発展的な計算に取り組んだりする学習を行うことで、定着を図っていく。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

- ・ここ数年間は、全体的に向上が見られたり、低下が見られたりと、年度により差がある。
- ・今年度は算数の正答率が、全体的に良好な結果となった。
- ・今年度は国語の正答率が、全体的に課題が残る結果となった。
- ・国語・算数ともに、無解答率が低く、良好な結果となった。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- ・国語では学力高位層と中位層の割合が低下し、学力低位層の割合が上昇している。
- ・算数では、学力低位層と中位層の割合が低下し、学力高位層の割合が上昇している。
- ・国語では、エンパワーメント層の割合が、4年連続で低下し、改善傾向である。
- ・算数では、エンパワーメント層の割合が、2年連続で低下している。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

1 基礎学力の定着

- ① スモールステップやスパイラル方式で学習を進め、着実な学力の定着を図る。
- ② タブレットを積極的に活用し、児童が意欲的に学習に向き合えるよう取り組む。
- ③ 主体的に学ぶ力を育成するために、自主学習を3年生以上で行っている。児童の意欲を高めるために、各学年や学級で見本となる自学の内容を掲示するなど、児童の関心が高まるように工夫している。

2 言語活動の充実

- ① 児童が興味のあることを担任が意識して「やってみよう」と思える活動を提示する。
- ② 文字数を意識したり思考に関わる言葉を使ったり、児童が意欲的に取り組む課題設定が児童に「つけたい力」につながるようにしている。

3 授業方法・内容の工夫と改善

- ① 職員研修として「主体的な対話を引き出す授業づくり」をテーマに「単元計画検討会」を行っている。他学年の教材や言語活動の在り方を、職員全員で事前に研究することで、教職員個々の授業力の向上だけでなく、系統立てられた授業内容にもつながり、学校全体の指導改善につながっていると考えられる。
- ② タブレットを有効活用しながら、個々に合った習熟を行ったり、画面共有などを使って一人一人がお互いの考えに触れたりして学び合えるように、ICTを効果的に活用している。

4 学校全体としての学力保障の取組み

- ① 昨年度より、研究教科を算数科から国語科へと変更して、2に挙げた言語活動の充実を中心に取り組んでいる。今年度も国語に対する児童へのアンケートや普通の授業の様子を積極的に交流するなどして、国語科に対する本校の児童の強みや弱みなどを把握することに努めている。
- ② 「学力保障」と「学力向上」のちがいを教職員で共通理解し、児童をひとまとまりとしてとらえるのではなく、児童一人ひとりへの「学力保障」という視点を授業の中で大切にしていこう。
- ③ 朝学習(モジュール学習)や宿題の内容を学期ごとに検討したり、評価をつける方法を共有したりするなど、指導と評価の一体化をめざしている。